

都市鎌倉と中世びと

中世の鎌倉

みなものよりとも ほんきよち
源頼朝は本拠地として鎌倉の地を選びました。ここは、源氏にとってゆかりのある場所だったこと、古代より鎌倉郡の郡衙が置かれていたこと、三方を山にかこまれ、防御しやすい土地であることも重要な要素でした。鎌倉への出入りには切通しと呼ばれる山越えの道を通る必要がありました。頼朝は鶴岡八幡宮とそれに向かって伸びる若宮大路を中心に鎌倉の町づくりを進めました。



また、鎌倉の海岸は遠浅なので、大型船を停泊させるために和賀江島が築かれました。けんちょうじ えんがくじ けんちょうじ えんがくじ
建長寺、円覚寺など、のちに鎌倉五山と呼ばれる大寺院も建立されました。

掘り起こされた鎌倉



幕府の有力な御家人たちは、大きな通りの周辺に館をかまえました。人々の生活を支えるため、さまざまな生活物資を扱う商人や職人も多く住んでいました。

発掘の結果、国産の陶器や中国からの輸入品の青磁のほか、箸やしゃもじ、下駄、扇の骨、櫛など生活の道具類も数多く見つかりました。囲碁、将棋、双六なども見つかり、当時の生活の様子がうかがわれます。

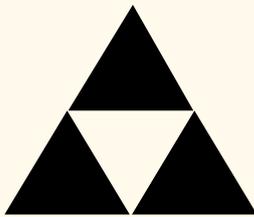
鶴岡八幡宮の発掘調査では、碗や皿などの漆製品が多く出土しています。様々な文様が付けられており、木地も薄く、良質の漆製品がたくさん出土するのが鎌倉の特徴です。

武士の主従関係 ～花押が書かれた文書～

花押は署名の代わりに使われる記号・符号のことです。展示されている源頼朝の花押がある文書は、下野（いまの栃木県）の御家人、小山朝政に対し地頭の職を認めたものです。御家人は將軍頼朝の花押が書かれた文書を求めました。御恩と奉公の関係がよくわかる資料です。



執権 北条氏の権力の拡大



展示されている北条氏の家紋が書かれた旗は、北条一族が守護を務めた若狭（いまの福井県）の古い家に伝わったものです。家紋の下には、航行の自由や港の利用を認めたことがしるされています。北条氏の勢力拡大とともに、このような旗をひるがえした船が諸国から鎌倉や六浦に物資を運んでいました。

後北条氏の関東制覇

戦国大名の北条早雲（伊勢新九郎盛時）は、小田原城を根拠地に三浦氏を滅ぼすなど、相模を支配しました。2代氏綱、3代氏康の代にかけて、周辺の大名とある時は戦い、ある時は同盟を結びながら領国を拡大していきました。4代氏政、5代氏直の代には、その勢力は関東一円に及びました。しかし、1590（天正18）年、天下統一をめざす豊臣秀吉に攻められ、滅亡しました。

